

妙高の秋

島村利正



妙高の秋

島村利正

中央公論社

妙高の秋

八五〇円

©一九七九

昭和五十四年六月三十日初版発行
昭和五十五年二月二十日再版発行

著者 島村利正

発行者 高梨 茂

印刷 三晃印刷
製本 日本出版工業

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋一丁八一七
電話 五六一―五九二一
振替 東京二三四
検印廃止

目次

妙高の秋

焦土

蘇水峽

みどりの風

暗い銀河

一石橋幻景

あとがき

発表誌一覧

5

37

63

81

109

151

204

205

妙高の秋

妙高の秋

色づいた櫟の落葉が、音もなく散りはじめている。氣候不順の夏もすぎて、漸く、多摩川沿いの杜も、秋の気配がふかくなった感じである。旅先でひいた風邪も漸く癒ったようだ。今年は志賀直哉先生が亡くなって七年になる。去年も都合で命日にお伺い出来なかったので、今年は青山のお墓に参ってから、渋谷の志賀邸に伺おうと思っていた。しかし、そのときはまだ、咳と微熱がどうしても除れなかった。こんな軀で命日に伺って、皆さんに風邪を伝染したら大へんである。結局、断念して、連絡を下さったM氏にそのことを電話する。

この二、三年、季節の変わり目がくると、いつも旅して歩いた各地の風光が、こころの底で淡い残光をくすぶらせている。以前に比べて、旅に出ることはほとんどなく、小さな自室に閉じこも

りで仕事を続ける日が多い。ほんとうはそれだけに、夏には鮎の激流を思い出し、秋には紅葉の谷や湖が、もっと鮮烈な彩りでよみがえってこなければならぬ。積雪の冬から春の景色も、もっとつよいひかりがあつていい筈だ。人間の世界ばかりを思い描いていると、それがたまらなく嫌になることがある。そんなとき、風景を思い出すと救われる。風景には惨烈な人間模様には負けないつよさがあるようだ。しかし、自然の美しさの移ろいばかり追っていると、こんどはまた、人間の世界に還りたくなる。このごろ思い出す風光の彩りが、以前に比べて淡くなったように感じられるのは、年齢と精神の衰弱からくるのだろうか。まだまだ人間の愛憎を、いっぱい描かなければ死ねない筈だ。

もともと涙もろいほうであるが、忘れられない恩顧を受けた故人の方たち、とりわけ、右も左も判らなかつた少年の私の面倒をみてくれた奈良、飛鳥園主の小川晴暘。繊維の統制団体で特別に目をかけて貰つた理事長の臼井大翼^{ひらすず}。そして終生慈顔をそそいで下さつた志賀直哉の三先生のことを思い出すと、深夜に突然、涙が溢れてきたりする。故人になつた方には、いっそうその感がふかい。

今年の秋は、珍しい旅行をふたつ続けてやつた。その旅行中のどこかで風邪をひきこんだに違いないが、短い旅のなかで、減多に思ひ出さない父親のことがしきりに思ひ出されたのは不思議であつた。歩いてきた風景も濃厚なところばかりであつたが、その後、風邪で寝たり起きたりの

仕事のなかで、風景と父親のことが一緒に点滅した。風景の彩りも久しぶりに一新した思いがあったが、父親だからと甘えて、しみりと思ったこともなかった父親の表情が、思いがけないつよさで胸を締めつけてきたりした。

ふたつの旅行とは、こんな風のものであった。最初に京都へいった。何年も前から心で準備をしている、ある長篇の取材のためであった。S社のI氏と一緒にあった。三泊の予定であったが、私だけは仕事の都合で、四泊しなければならないかも知れない。どちらも忙しいからだであった。京都に夕刻着き、車ですぐに北白川に住む古美術学者、M氏を訪ねる。京都らしい暗い屋敷街のなかであった。M氏は大正十三年から飛鳥園で出していた豪華な古美術雑誌「仏教美術」の初代編集長であった。そのころの事情を教えてもらうためである。

少年であった私は、飛鳥園で主催した、古い寺でのM氏の臨地講演も聴いている。雑誌の手伝いから寺々の撮影にも同行したことがあり、八十を過ぎたM氏が、私のことを覚えていて下さったのは嬉しかった。M氏は軀の不調のなかで二時間もはなしてくれた。八時過ぎ、M氏の邸を辞すると、京都ホテルへいった。部屋にカバンを置いて、加茂川沿いの小さな家で食事をする。

翌朝、食事のあと、ふたりでカセットとノートの整理をする。十時ごろ京都を発って大阪へゆく。東住吉区のS老女史を訪ねる。私はもう二度目の訪問であるが、身寄りのすくないS女史は

喜んでくれる。若かった小川晴暘氏が勤めた、大阪朝日新聞社のカメラマン時代をさらに精しく教えて貰う。昨夜のM氏と同じように二時間もはなしてくれる。S女史もわれわれもすこし疲れるが、S女史が点ててくれた抹茶で元氣を取りもどす。

四時ごろ同家を辞し、近鉄奈良線に乗換える。京都も大阪も、戦前から勤めた繊維の統制団体の関係で、産地としての街の様子はよく知っている。和歌山も兵庫も知っている。しかし、奈良はそのころ、繊維産業とは縁がうすく、その仕事でいったことはいちどもない。私にとっては第二の故郷といってもよく、奈良へ向うときは、いつも稚純な氣持がたかぶってくる。

電車はむかしのように河内平野を駆けあがり、生駒山のながいトンネルにはいる。これを抜けるとすぐに奈良だ。富雄を通過する。この近くの長弓寺と塔のある靈山寺は、奈良にいたころ撮影にいったことがある。西の京の西大寺駅はいちばんよく知っている。唐招提寺も薬師寺も、そして西大寺も秋篠寺も、ここで降りるか乗換えなければならぬ。I氏に地理的な説明をする。説明をしながら胸のなかにある資料としての記録を復誦している。近鉄の終駅は奈良の登大路町である。

駅の近くで時間はずれの食事をすませ、いそいで博物館近くの飛鳥園へゆく。晴暘氏の三男、当主の光三氏や皆が待っていてくれる。光三氏とはすでに何回も資料的な打合せをやっているが、さらに続けなければならない。I氏からの注文もある。奈良ではこの仕事のほかに、私の来訪を

待っている違うグループがあった。NHKの「新日本紀行」の制作スタッフである。電話ですでに打合せ済みで、私たちが訪ねようとしているいくつかの場所が、やはり撮影対象になっているようで、仕事の運びとしては好都合であった。夜の九時ごろまで、光三氏を混えて、そのスタッフと打合せをする。

宿は奈良ホテルはとれず、私の希望でむかしの遊廓、木辻のなかの旅館、静観荘へゆく。私はこの宿は二度目だ。以前は遊廓のなかでいちばん大きな娼家であったという。遣手婆さんと交渉する引きつけ部屋などは現代風になっているが、広い中庭をめぐる総二階の廊下や部屋には、むかしの面影がそのまま遺っている。大阪からの旧街道はこの木辻をのぼり、元興寺を右に見ながら奈良でいちばん賑やかな街筋、餅飯殿町へくだり、興福寺南円堂下の三条通りにつながる。井原西鶴の書いたものにも出てくる木辻の遊廓であるが、いまでも何軒も遺っている妓楼風の古い建物は、徳川期のいつごろのものだろうか。

翌日、「新日本紀行」の早朝撮影のこともあって、七時に高畑の新薬師寺にゆく。ここの住職T師は若いころ東大寺にいて、小川さんをいちばんはじめに大仏殿の屋根に案内したひとだ。ここでは昭和十八年三月に盗まれた白鳳の金銅仏、七十三センチの香薬師のこともさらに聞かなければならない。本堂の左側の柱に刻まれた古い落書、鹿を追う獺師山を見ず、は、何年か前に見たときよりはるかに味のある字に見えた。「新日本紀行」の撮影も手伝う。終って次の場所に移

動する時間を縫って、光三氏の車で瀧井さんの旧居、志賀さんの旧邸をI氏と見る。

昼食後、光三氏の案内で、さらに東大寺の大湯屋から二月堂に上がり、修学旅行の生徒で混雑する三月堂を見る。志賀さんが早く土に還してやりたい、と、云った、くずれかかった塑造の吉祥天を見ているうちに、むかし博物館前の小径を、はやい足で歩いていった長身の志賀さんの姿を思い出す。午後は飛鳥園のすぐ下も手の旅宿、日吉館の撮影を手伝う。古い宿帳も別に見せて貰う。

次には全員、車で西の京の唐招提寺に移動する。長老、森本孝順師と久しぶりで逢う。パリの鑑真展から帰ったばかりであるが、この率直な人柄はパリの真ん中にいても、すこしも変らないに違いない。この寺には思い出がいっぱいある。撮影が終って唐招提寺の前で、NHKのスタッフと手を振って別れる。そのあと薬師寺の新しい金堂、そして東塔を見て奈良に帰る。猿沢の池の近くの料亭で、光三氏と飛鳥園専務の有本氏、I氏、私とで資料の打合せと会食。その夜も木辻に泊る。

私は出来ればさらに、小川さんが会津八一の指導で最初の大撮影を行なった室生寺と、そして当麻寺^{たまたでら}のことももうすこし調べたかった。I氏は翌日はもう東京での約束の仕事があった。私も二日のちには信州の故郷の町へゆくことになっていた。約束してから三年越しの講演会の仕事であった。PTAの婦人たちを中心に、一般聴衆をふくめて三、四百人の集りのようであった。私

は故郷での講演会など、思っただけで二の足を踏む思いであったが、私の生家のある同じ町内のPTA会長や委員たちに、だんだんに説き伏せられた恰好で、三ヵ月も前からあらためて約束する羽目になっていた。

そんな気持ちになったのには、また別な心のうごきや事情もあった。三人いた姉のうち、伊那市に嫁した末の姉は早く死んでいたが、あとのふたりはこのところ続いてつれあいを亡くしている。私のかわりに生家を継いだすぐの弟は、戦争末期に満州で戦病死しているが、次の弟が終戦で海軍から還り、あらためて生家を継いで今日に至っている。末弟は中学時代から心臓に故障のある軀であったが、それでも努力して、特殊な電気計器会社の筆頭常務をしている。この講演会を機会に故郷に皆が集まり、その翌日、生家の定休日を利用して町を離れ、どこかの静かな温泉宿で、水入らずではなし合おうという提案が生家の弟から出ていた。減多にないことであった。

それにもうひとつあった。生家の改築のことである。徳川期から海産、乾物を商っていた生家は、戦後に店舗だけはいくらかひろげていたが、裏につづくいくつかの土蔵も取りこわして、近代的なスーパーマーケット風に改築するのが弟の願いであった。商売熱心な弟は、もうそれだけの準備もしているようであった。

しかしそれには、中庭にある一本の老松が問題であった。寒い国だけに育ち難かったかも知れないが、それでも町のなかで、二階の屋根をはるかに抜いていた。この家から出たものは、松に

郷愁を持っていた。その想いは私がいちばんつよかったかも知れない。弟は改築を決意したとき、夜分に長い電話をかけてきた。

「……………松をなんとか生かそうと思って、庭師と移植も相談したが駄目らしい。鉄骨を打込むので、どうしても切ることになる……………今年は例年になく立派な花が咲いたが……………」

弟の声は思いのほか、すこし沈んでいた。彼だって海軍の激戦のなかで、この松を思い出したに相違ない。しかし結局、家が大切か松が大切か、ということで、諒解して貰うんだな、と、やんわりやられて私は引き退った。家の改築は去年の夏に終わっていた。その改築記念をこんどの温泉旅行にふくめよう。これは姉たちの意見であった。

私はこんな風にだんだんに前後から追いつめられた恰好で肚を決めたが、講演の主旨がすこしも纏まらなかった。PTAの会長からはむかしの城下町の様子や、文学少年として育ち、やがて奈良へゆくまでの経緯、そして当時の奈良の生活など、その辺の事情を一時間半ばかり、夜六時から福祉会館ではなしてほしいという希望であった。私は京都、奈良の取材旅行中は、講演のことは考えないことにしようと思っていた。取材はI氏が応援してくれるカセットと写真、そして私のノートで、完全に記録される。東京へ帰ったらそれを別の机の上にそっと置いて、すぐ頭を切り替えて講演の主旨を考える。私はそう思いながら、やはり心のどこかで講演のことを思っていた。